

# 室岡山ノ上遺跡

八女市大字室岡所在山ノ上遺跡2次、3次調査概要

八女市文化財調査報告書 第12集

1986

八女市教育委員会

## 序

八女市室岡地区は、昭和37年亀ノ甲遺跡の発掘をきっかけに、昭和46年九州縦貫自動車道関係遺跡の調査、昭和56年山ノ上遺跡、昭和58年北小路遺跡の調査と、相次いで発掘調査が行なわれ、この地区の古代文化が次第に明らかになっています。

今回の調査は、昭和56年度に続いて国、県の補助を受けて実施しましたが、県教育委員会、および、土地所有者の江崎光輝氏ほか、関係各位の御指導、御協力により多大な成果をあげることができました。

調査結果をまとめた本書が、今後の研究資料の一助になれば幸いです。なお、本書の刊行にあたり、関係各位に対し、深い謝意を表します。

昭和61年3月31日

八女市教育委員会

教育長 坂 田 不二夫

## 例 言

1. 本書は八女市が、国、県の補助を受けて昭和59年度と60年度に実施した、八女市大字室岡所在、山ノ上遺跡の第2次、第3次緊急発掘調査の概要である。
2. 本書に掲載した図は、赤崎敏男、劉 茂源、横田公己が作成し、赤崎が浄書を行った。なお、遺物整理の一部は、九州歴史資料館岩瀬正信氏の指導で、九州歴史資料館で行った。
3. 遺構、遺物の写真は、赤崎が担当した。
4. なお、本書に用いた遺構番号は、1次調査からの通し番号を用いた。
5. 本書の執筆、編集は赤崎が行った。

## 本 文 目 次

1. はじめに .....	1	3. 調査の概要 .....	3
2. 位置と環境 .....	1	4. ま と め .....	20

## 1. はじめに

室岡山ノ上遺跡は、福岡県八女市大字室岡字山ノ上1031番地に所在する。

本遺跡東側の330㎡については、昭和56年度に第1次の調査を実施し、数多くの遺構が発見された。しかし、調査後も畑地化のため、毎年少しずつ地下げが行われ、次第に未調査の部分にもおよんできた。このため、八女市教育委員会は、県教育委員会文化課と協議を行い、昭和59年度に第2次調査として440㎡を、昭和60年度に第3次調査として、350㎡の調査を実施した。

第2次調査は、昭和59年7月23日から8月31日まで、第3次調査は、昭和61年1月13日から1月25日まで、八女市教育委員会が主体となって行った。

調査関係者は次の通りである。

### 第2次調査

八女市教育委員会 教育長 坂田不二夫

社会教育課長 松延繁太、同係長 杉山信行、同主任 小野勝輝、同係員 田中博文、平田高義、川口美文、松尾弘子、赤崎敏男（調査担当）

調査補助員 横田公己、多々良松男（国学院大）

調査作業員 加藤満義、星野 明、大石 満、政次シメノ、大石ミツ子、江上ミサキ、田辺神奈、壇 花子、橋爪きりえ、原 律子

### 第3次調査

八女市教育委員会 教育長 坂田不二夫

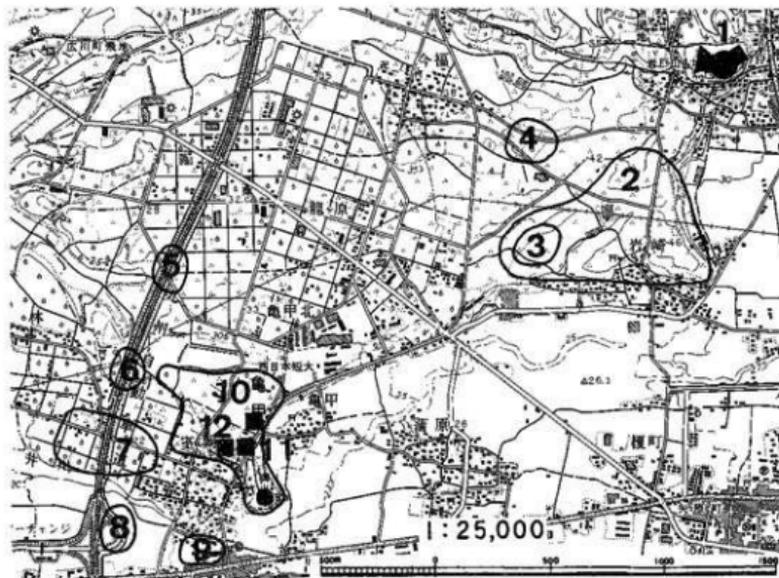
社会教育課長 末継清一郎、同係長 杉山信行、同係員 梅野 満、平田高義、川口美文、松尾弘子、赤崎敏男（調査担当）

調査作業員 星野 明、末継和久、政次照明、政次シメノ、藤元ミヨシ、江上ミサキ、松延芳子、金納ツエ、大塚珠美、田辺神奈、江上貴子、矢賀部てる子、大塚ヨシエ、西田マサル

なお、調査にあたって、第2次調査では九州大学研究生劉 茂源氏に調査に参加いただき、第2次、第3次調査では、福岡県教育庁南筑後教育事務所技術主査川述昭人氏、福岡県文化財保護指導員木附光雄氏をはじめ、地権者の江崎光輝氏、地元室岡町内会の皆様には、多大なる御援助をいただきました。記して謝意を表します。

## 2. 位置と環境

室岡山ノ上遺跡は、八女丘陵からのびた台地の東端部に位置し、現水田面からの比高は10m程である。台地の先端には標高44.8mの“岡山さん”があり、半島状に突き出した姿は、ひときはめ



- |                 |                |                |
|-----------------|----------------|----------------|
| 1. 岩戸山古墳(前方後円墳) | 5. 西中ノ沢遺跡(弥生)  | 9. 岡山小学校遺跡(弥生) |
| 2. 岩崎遺跡(弥生)     | 6. 坊野遺跡(弥生)    | 10. 山ノ上遺跡      |
| 3. 下山遺跡(縄文)     | 7. 野口遺跡(弥生・古墳) | 11. 亀ノ甲遺跡      |
| 4. 豊福遺跡(縄文・弥生)  | 8. 道添遺跡(弥生・古墳) | 12. 北小路遺跡      |

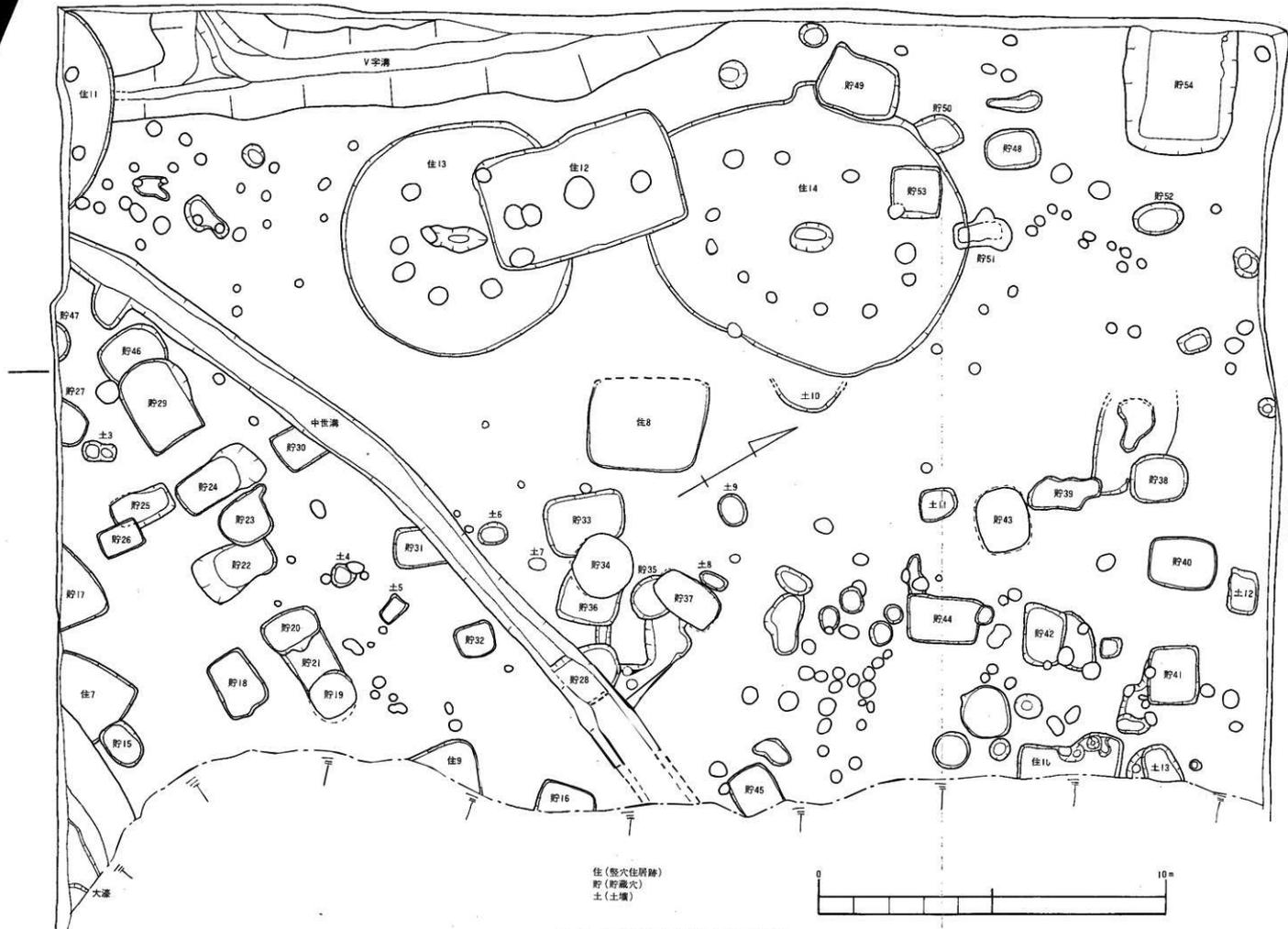
第1図 室岡山ノ上遺跡と周辺の遺跡

だっている。

山ノ上遺跡の南側160mのところには、昭和37年～38年にかけて調査され、住居跡4軒、甕棺20、箱式石棺25、土墳墓21、溝1が発見された亀ノ甲遺跡があり、南西200mには、昭和58年に調査され、住居跡6軒、ピット8、箱式石棺11、石蓋土墳墓1、土墳墓4、甕棺6、木棺1、大溝1、中世溝2が発見された北小路遺跡がある山ノ上遺跡の第1次調査では、住居跡6軒、貯蔵穴14基、土墳墓3、箱式石棺2、甕棺1、溝3が発見された。

亀ノ甲遺跡、北小路遺跡、山ノ上遺跡はいずれも近接した台地上にあり、同一遺跡と考えられる。

詳しくは、八女市文化財報告書第8集「室岡山ノ上遺跡」にすでに報告しており参照されたい。



第2図 遺構配置図 (1/100) (第2次・第3次調査)

### 3. 調査の概要

第2次調査で検出された遺構は、竪穴住居跡(7号~10号)4軒、貯蔵穴(15~45号)31基、土壇11基、溝2条で、溝1条を省きいずれも弥生時代前期後半から、中期前半までの遺構である。なお、第1次調査の際に見られた墳墓は検出されなかった。

第3次調査で新たに検出された遺構は、竪穴住居跡(11号~14号)4軒、貯蔵穴(46号~54号)9基、V字溝で、竪穴住居跡1軒を省き、いずれも弥生時代前期後半から中期前半までの遺構である。

#### (1) 竪穴住居跡

2次、3次調査で、計8軒検出された、円形長方形の住居であるが、半数の住居跡は一部の調査で、全体をつかむことはできなかった。

#### 7号竪穴住居跡(第4図)

大濠と19号貯蔵穴によって切られている。規模は不明であるが、長方形になると思われる。遺物は出土しなかった。

#### 8号竪穴住居跡(第5図)

一部を調査できなかったが、南北3.45m、東西約2.5m、長方形の住居で、住居内の柱穴はない。

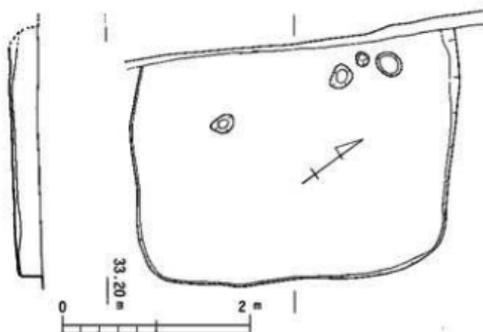
遺物は甕、壺の小片が出土している。甕は口縁部についた突帯が大きく、胴部についた突帯は



第3図 室岡山ノ上遺跡2次調査全景(南より)



第4図 7号竪穴住居跡 (1/60)



第5図 8号竪穴住居跡実測図 (1/60)

形骸化したものになる。壺は口縁端部がややね上がり、外側に刻目を入れている。弥生時代中期前半頃と考えられる。

9号竪穴住居跡 (第6図)

大半が削られており、規模等は不明であるが、隅丸長方形になると思われる。

遺物は甕の小片が出土した。

10号竪穴住居跡 (第7図)

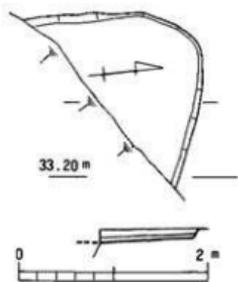
東側の大半はすでに削られており、西側も擾乱を受けているが、平面形は方形で、1辺が2.9mあり、正方形に近い住居跡と思われる。

遺物は甕、壺の小片とすり石が出土している。甕は口縁部に大きく突出した突帯をつけ、胴部には、低い突帯をつけ刻目を入れている。弥生時代中期前半頃と考えられる。

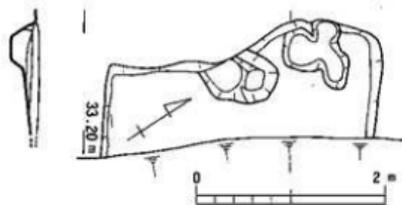
11号竪穴住居跡 (第8図)

南北にのびるV字溝の埋没後につくられている。住居跡の一部の調査であるが、復元すると直径7m前後をはかる円形の住居跡と思われ、柱穴等は不明である。

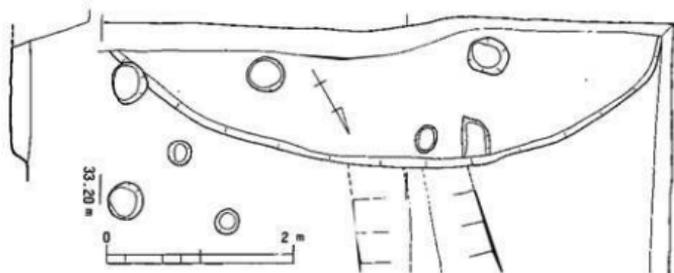
遺物は甕、壺の小片が出土しており、弥生時代中期前半頃と考えられる。



第6図 9号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第7図 10号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第8図 11号竪穴住居跡実測図 (1/60)

12号竪穴住居跡 (第10・11図)

13号、14号住居跡を切ってつくられた、南北5.9m、東西3.5mをはかる長方形の住居跡である。柱穴は2本柱と考えられるが、北側の柱穴は浅い。また、北西隅より多量の焼土が検出された。

遺物は壺、甕、鉢が出土した。壺は口縁部が「く」の字状に強く折れるもので、内外に荒い刷毛目調整を行っている。鉢は平底で、内外、底部とも荒い刷毛目調整である。弥生時代後期後半頃と考えられる。

13号竪穴住居跡 (第11図)

直径7mをはかる円形の住居跡である。住居跡のほぼ中央には、だ円形状のピットがあり、そのピットを中心にして、周囲に柱穴を配している。住居跡内には後世のピットが多く、不明瞭ではあるが、6本の柱を使用していたものと考えられる。柱位置から推定すると、棟の方向はほぼ



第9図 室岡山ノ上遺跡3次調査全景 (南より)

南北を向いていたものと思われる。

遺物は覆土中からの出土が少なく、甕、壺の小片が出土した。6は壺の底部で、細かな刷毛目調整をしている。また、床面上より砂岩質の砥石も出土している。弥生時代中期前半頃と考えられる。

#### 14号壑穴住居跡（第11図）

長径約9.5m、短径7.4mをはかり、平面形は、だ円形の住居跡である。50、51号貯蔵穴を切り、49号貯蔵穴によって切られている。住居跡のほぼ中央部には、だ円形状のピットがあり、ピットを中心として周囲に柱穴が配置されている。

後世のピットが多いため明瞭ではないが、12本の柱を使用していたものと考えられる。柱の位置から推定すると、棟の方向はほぼ南北を向いていたものと思われる。

遺物は覆土中から甕、壺片、頁岩質扁平片刃石斧、黒曜石製石鏃、結晶片岩製紡錘車未製品が出土した。甕は口縁が平坦になり、底部はやや上げ底気味となるものもある。外面は刷毛目調整である。弥生時代中期前半頃と考えられる。

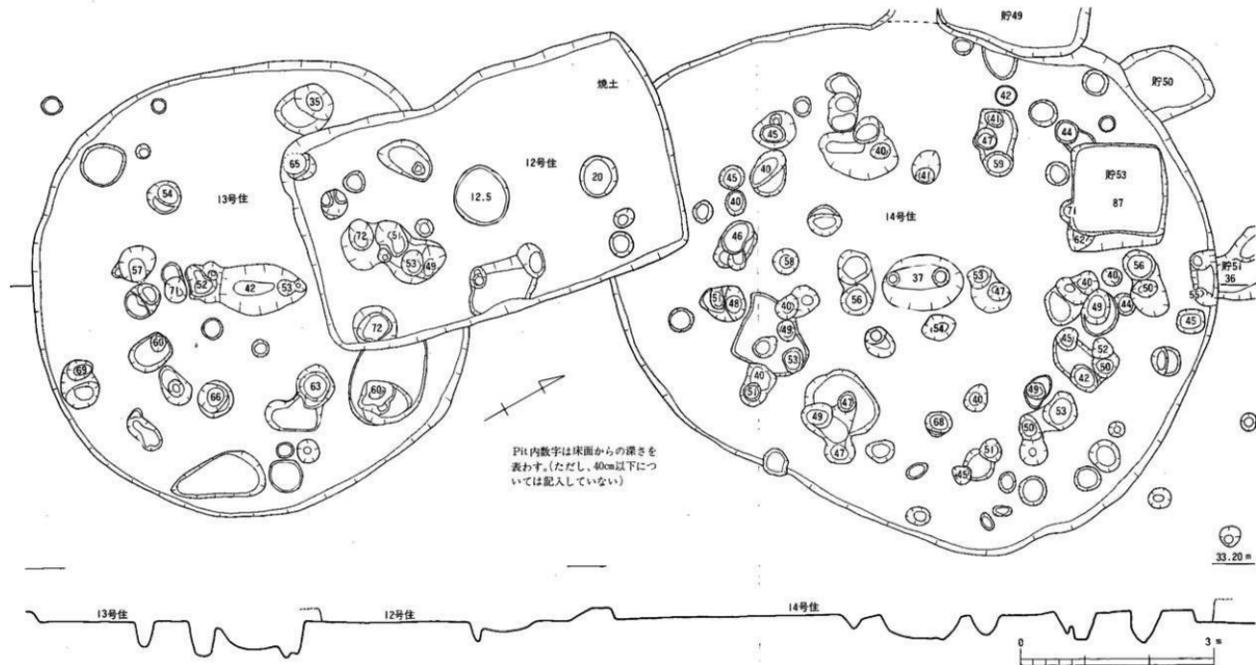
#### (2) 貯蔵穴（第13図）

貯蔵穴は第2次調査で31基、第3次調査で9基の計40基が、調査区のほぼ全域から検出された。出土遺物や切り合いから、ほぼ3時期に分けることができる。

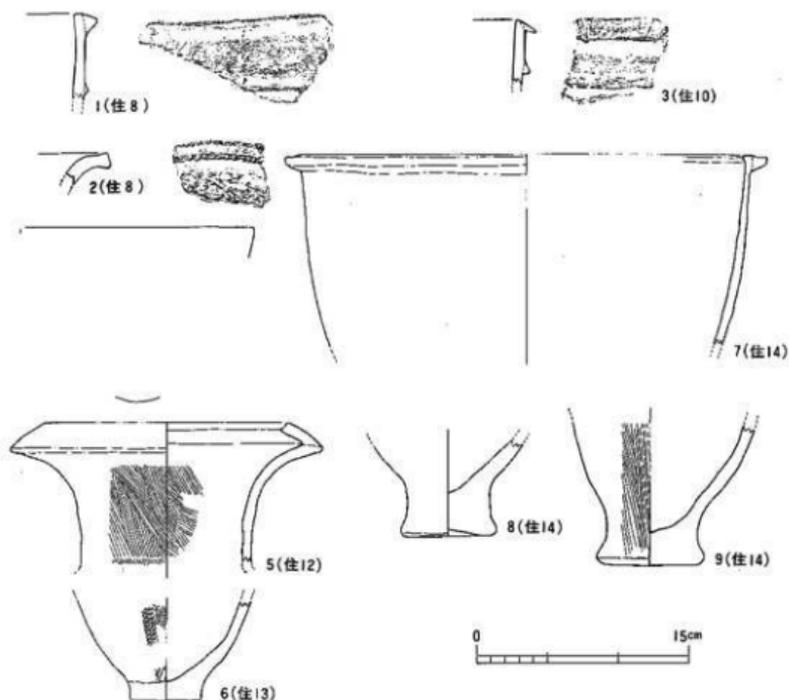
1期は、平面形が長方形、比較的大形で、規模も2.0×1.5m前後で、残りも良い。一部は円形の貯蔵穴によって切り込まれている。遺物は甕壺、鉢、土製紡錘車、石鏃、石のみ、石皿、すり石が出土しており、弥生時代前期後半頃のものと考えられる。



第10図 12・13・14号壑穴住居跡（北より）



第11図 12号・13号・14号竪穴住居跡 (1/60)



第12図 竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4) [( ) 内は遺構番号]

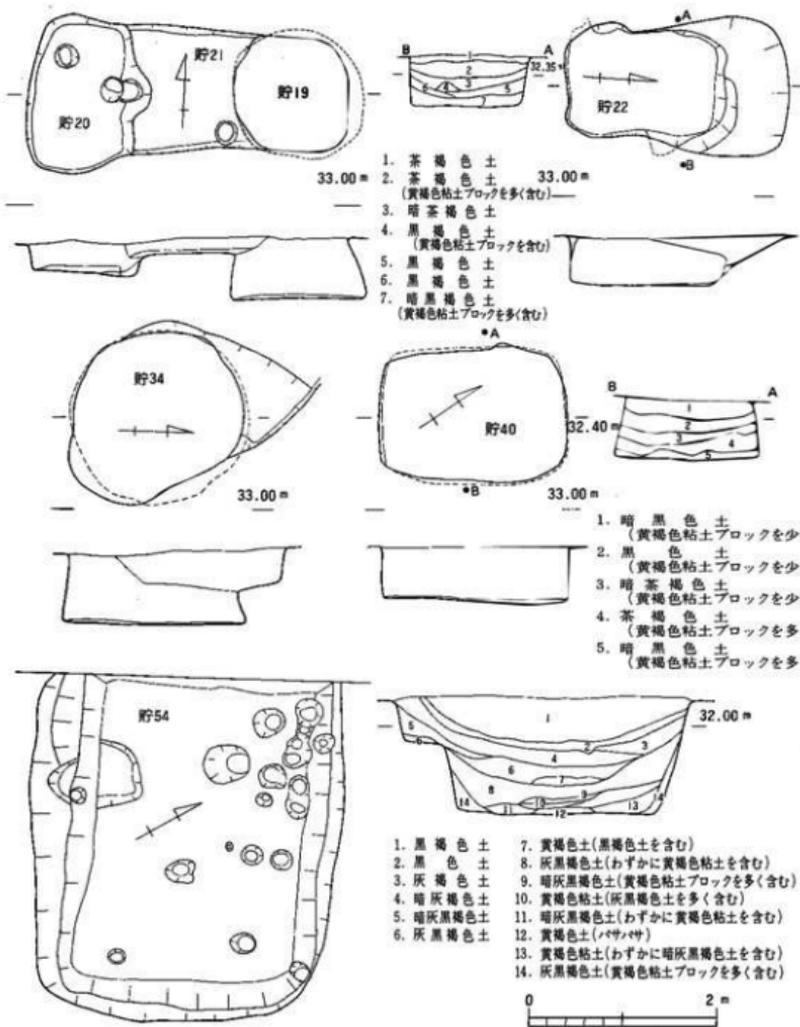
Ⅱ期は、平面形が円形の貯蔵穴で2基検出された。規模は直径1.5m前後で残りが良い。遺物は甕、壺、器台が出土しており、Ⅰ期より、わずかに後出するものと思われる。

Ⅲ期は、平面形が長方形や方形で、規模も1×1m前後と比較的小形の貯蔵穴が多い。器壁も低く、残りが悪い。遺物は甕、壺、高杯、器台、砥石、石皿、石剣が出土している。弥生時代中期前半頃と考えられる。

中でも、調査区北西隅で検出した54号貯蔵穴は、 $3.8 + \alpha \times 3.30\text{m}$ 、深さ1.3mをはかり、大形のものである。遺物は少ないが、大形甕片などを出土しており、弥生時代中期前半頃と考えられる。

### (3) 土 墳

11基検出された。平面形は円形、隅丸長方形だ円形があり、規模の小さな土墳が多い。いずれも遺物は少なく、性格は不明であるが、4号土墳からは、石鏃、石鏃末製品、安山岩片、黒曜石片

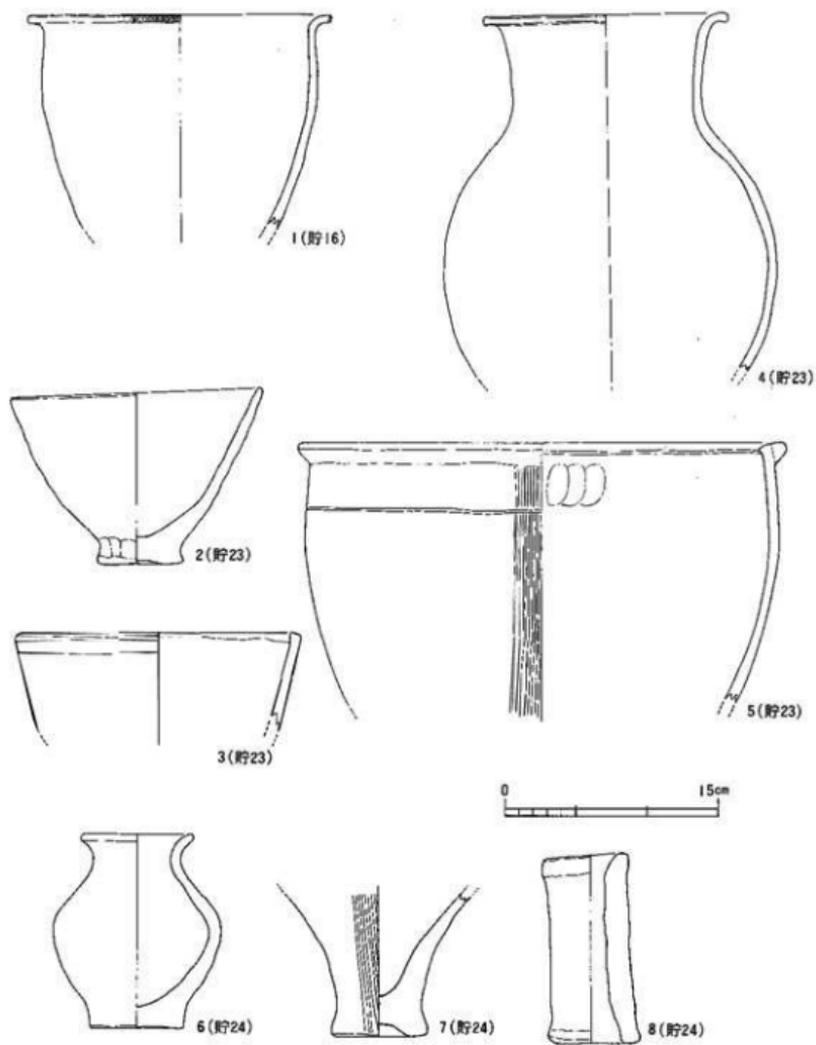


第13図 貯穴実測図 (1/60)

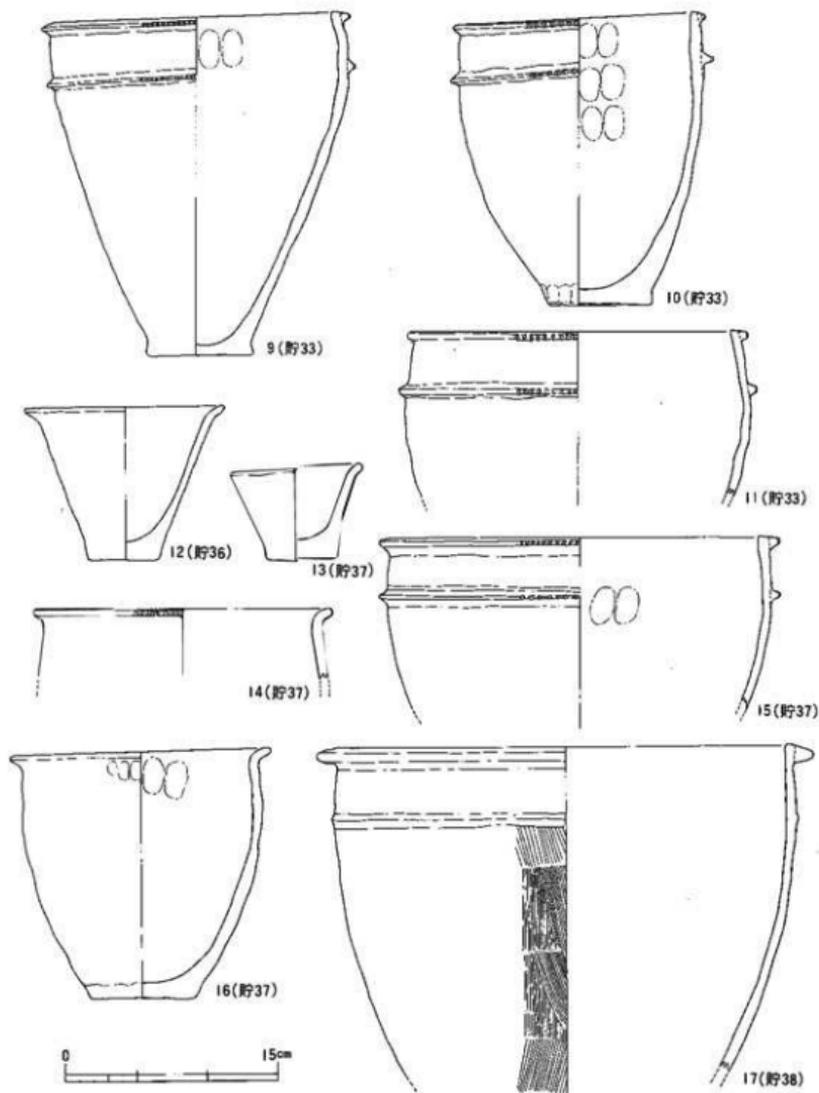
が多量に出土している。弥生時代前期後半から中期前半頃と考えられる。

第1表 貯蔵穴一覽表

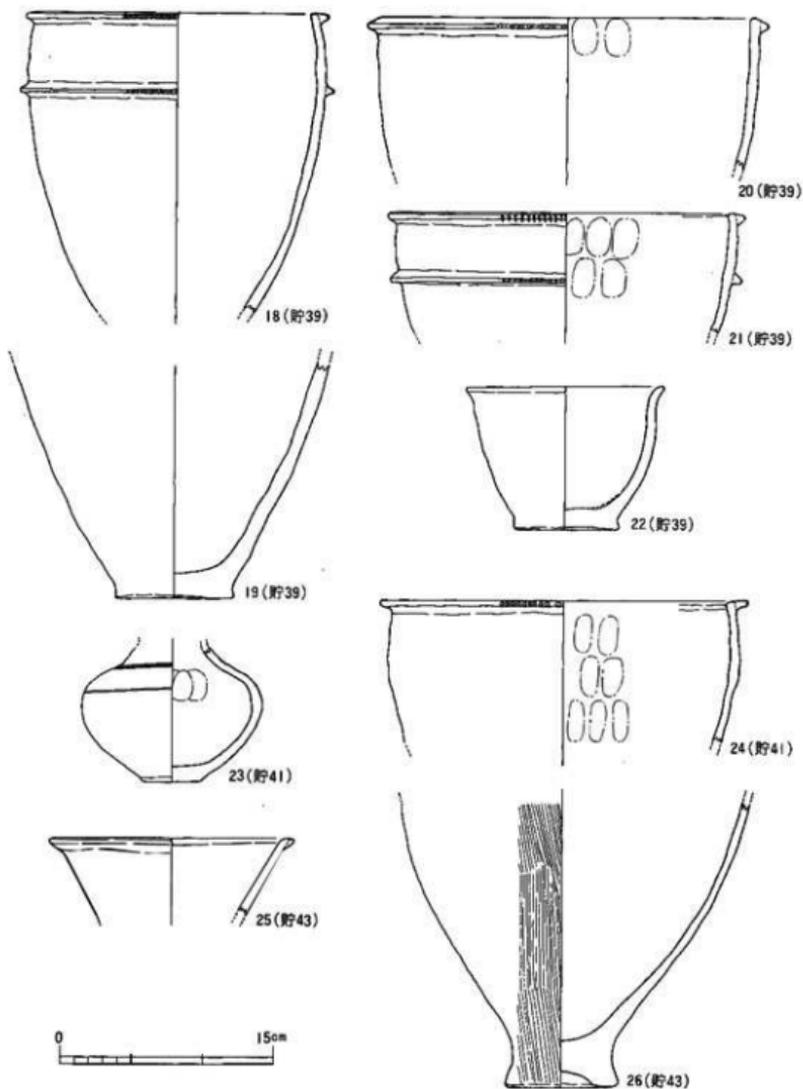
遺構名	形態	規模 長 短	出土遺物			時期	その他
			土器	土製品	石器		
15号貯蔵穴	長方形	1.27×0.80	甕・壺・高杯		安山岩片・黒曜石片 磁石(花崗岩)	中期前半	
16号貯蔵穴	長方形	? ×1.62	甕・壺			前期後半	
17号貯蔵穴	長方形	?	甕・壺			前期後半	
18号貯蔵穴	長方形	1.80×1.08	甕・壺		安山岩片	前期後半	
19号貯蔵穴	円形	1.37×1.37	甕		チャート片	前期後半	
20号貯蔵穴	長方形	1.58×0.90					
21号貯蔵穴	長方形	? ×1.2					19号貯蔵穴を切る
22号貯蔵穴	長方形	1.58×1.00	甕・壺・鉢		安山岩片 行鐵(安山岩)	前期後半	23号貯蔵穴に切られる
23号貯蔵穴	方形	1.35×1.25	甕・壺	紡錘車	安山岩片・黒曜石	前期後半	
24号貯蔵穴	長方形	1.87×1.13	甕・壺・器台		黒曜石・安山岩片の片(磁器 石皿(磁器) 竹石(花崗岩))	中期前半 前期後半	(上層) (下層)
25号貯蔵穴	長方形	1.65×0.40	甕		安山岩片	中期前半	
26号貯蔵穴	長方形	1.21×0.77	甕・壺			中期前半	
27号貯蔵穴	長方形	1.05× ?	甕・壺		石皿片(安山岩)	中期前半	
28号貯蔵穴	長方形	1.6×1.35					中世溝によって切られる
29号貯蔵穴	長方形	? ×1.78	甕・壺・支脚		安山岩片 磁石(砂岩)	中期前半	
30号貯蔵穴	長方形	? ××1.15	甕・壺			中期前半	中世溝によって切られる
31号貯蔵穴	長方形	? ×1.05	甕・壺		安山岩片 石銅片 (粘板岩)	中期前半	中世溝によって切られる
32号貯蔵穴	方形	1.1×0.97	甕			中期前半	
33号貯蔵穴	長方形	2.35×1.65	甕・壺			前期末	34号貯蔵穴に切られる
34号貯蔵穴	円形	1.90×1.90	甕・壺・器台			前期末	
35号貯蔵穴	方形	1.00× ?	甕・壺		安山岩片	中期後半	
36号貯蔵穴	長方形	1.7×1.25	甕・壺			前期後半	34号貯蔵穴に切られる
37号貯蔵穴	長方形	2.0×1.2	甕・壺		安山岩片・黒曜石片 行鐵(安山岩) 2	前期後半	(下層) 35号 層穴に切られる
38号貯蔵穴	隅丸長方形	1.50×1.24	甕・壺	紡錘車	安山岩片 行鐵(磁器片)	前期後半	
39号貯蔵穴	長方形	1.53×0.75	甕・壺			中期後半	
40号貯蔵穴	長方形	1.96×1.50	甕			前期後半	
41号貯蔵穴	長方形	1.63×1.35	甕・壺	紡錘車	安山岩片・黒曜石片 行鐵(黒曜石)	前期後半	
42号貯蔵穴	長方形	1.52×1.00	甕・壺		安山岩片・黒曜石片	中期前半	
43号貯蔵穴	隅丸長方形	1.90×1.58	甕・壺	紡錘車 2	(伊予) 安山岩片(磁器片) 石皿(磁器)	前期後半 中期前半	(下層)
44号貯蔵穴	長方形	2.00×1.23	甕			前期後半	
45号貯蔵穴	長方形	? ×1.20	甕・壺		安山岩片	前期後半	
46号貯蔵穴	長方形	1.95×1.75	甕			中期	
47号貯蔵穴	円形	1.15× ?	甕			中期	
48号貯蔵穴	長方形	1.60×1.20	甕・壺			中期	
49号貯蔵穴	長方形	2.40×1.80	甕・壺		安山岩片	中期	往14により切られる
50号貯蔵穴	長方形	? ×1.10	甕・壺			中期	往14により切られる
51号貯蔵穴	長方形	1.7×0.75	甕			前期	往14により切られる
52号貯蔵穴	だ円	1.42×0.83	甕・壺			前期	
53号貯蔵穴	方形	1.45×1.32	甕			前期	
54号貯蔵穴	長方形	3.8+2×3.30	大形甕・壺			中期	



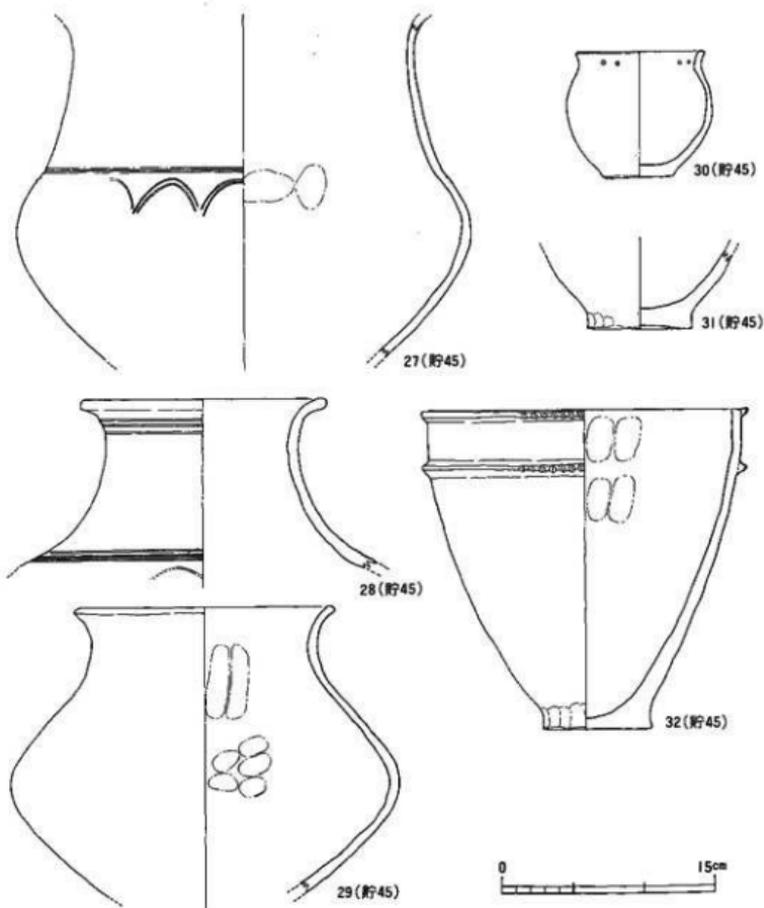
第14図 貯穴穴実測図 (1/4) (( )内は遺構番号)



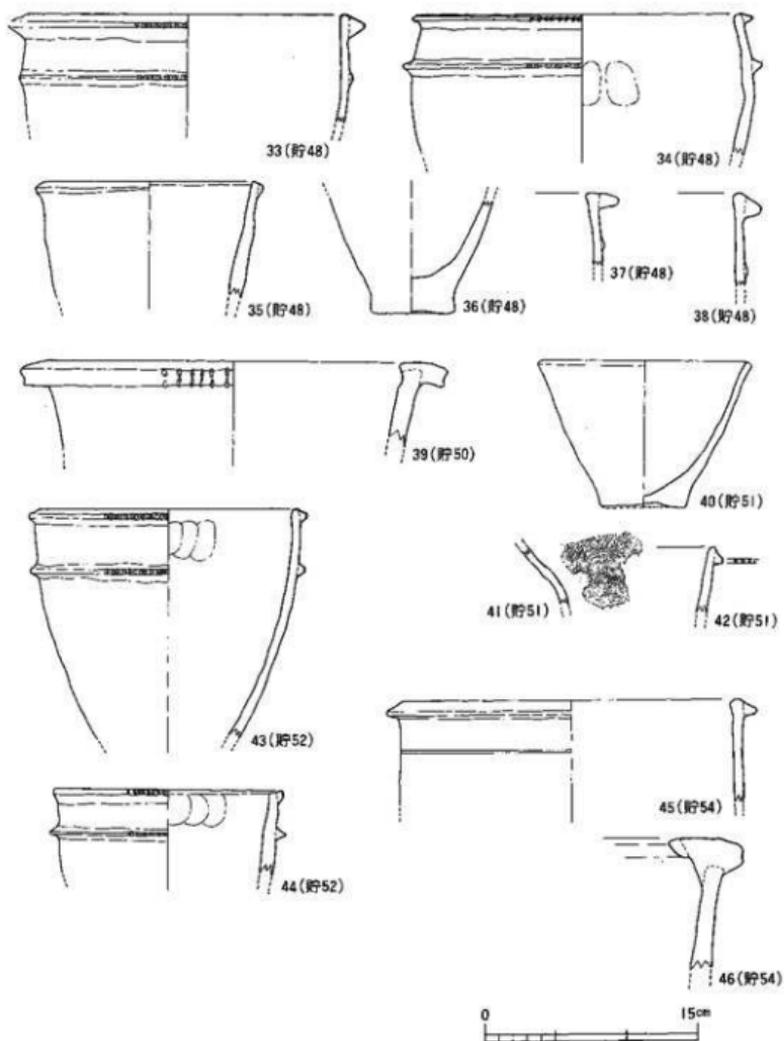
第15図 貯蔵穴出土土器実測図 (1/4) (( )内は遺構番号)



第16図 貯藏穴出土土器実測図 (1/4) (( )内は遺構番号)



第17图 第45号贮藏穴出土土器实测图 (1/4)



第18図 貯蔵穴出土土器実測図 (1/4) (( )内は遺構番号)

#### (4) 溝

3条検出された。

##### 大 溝 (第19図)

2次調査の際、調査区の西側で一部検出された。1次調査に続くものであるが、幅等は不明である。深さは1.55mあり、土層の堆積状態から、大きく3時期に埋没したことが判明した。今回の調査で、この大溝は、西側にやや曲がりかけている。遺物は、甕、壺、土製紡錘車があり、弥生時代前期後半頃と考えられる。

##### V字溝 (第20図)

3次調査の際、調査区の北西側で検出された。

ほぼ北から南にのびたV字溝で、幅2.3m、深さ1.8m、溝底部幅0.6mをはかる。V字溝は調査区の西隅付近ではほぼ直角に曲がる。しかし、曲がった部分から南へさらに幅1.3m、深さ1.5m、溝底部幅0.2mのやや狭くなったV字溝がのびている。遺物は堆積土中より多量出土しており、甕、壺、高杯、器台、支脚、紡錘車、片刃石斧、石砲丁、石鎌、石剣片が出土。特に石剣片は、両側の刃部分を赤色顔料で絞杉状に飾っていたものと思われる。いずれも弥生時代前期後半頃と考えられる。

##### 中世溝

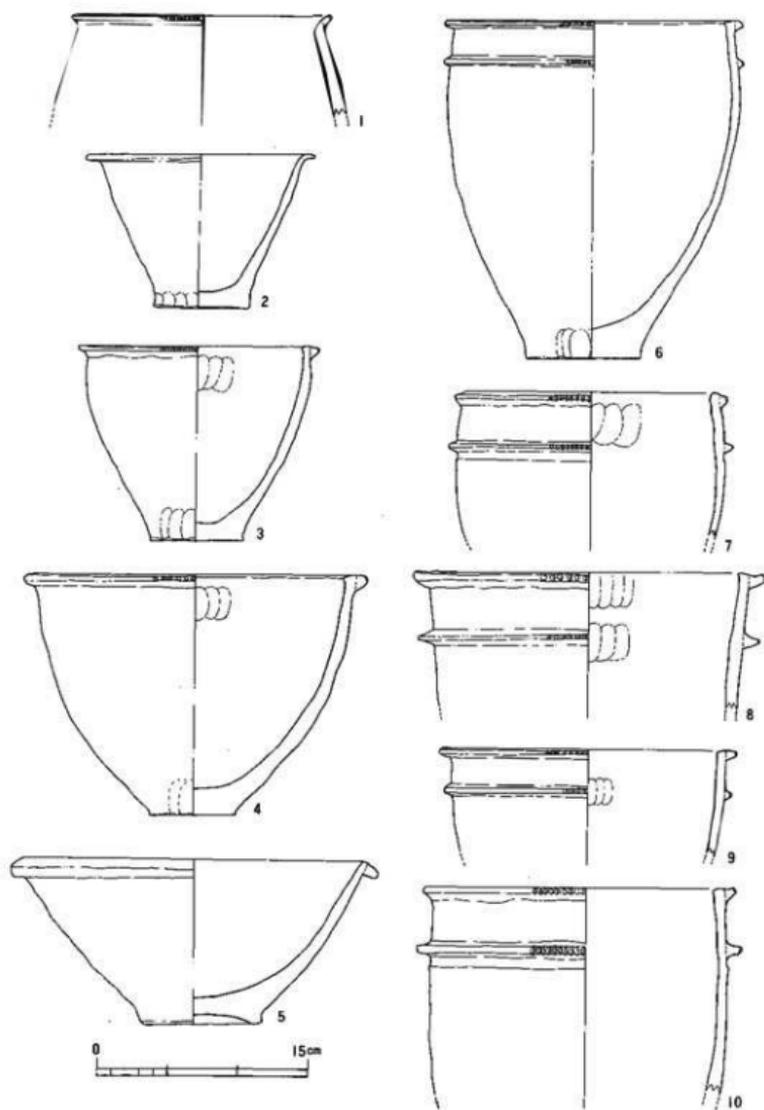
1次調査の際検出された溝で西から東に続く。幅1.1m、深さ0.4mで、弥生時代の遺構を壊してつくられている。遺物は出土しなかった。



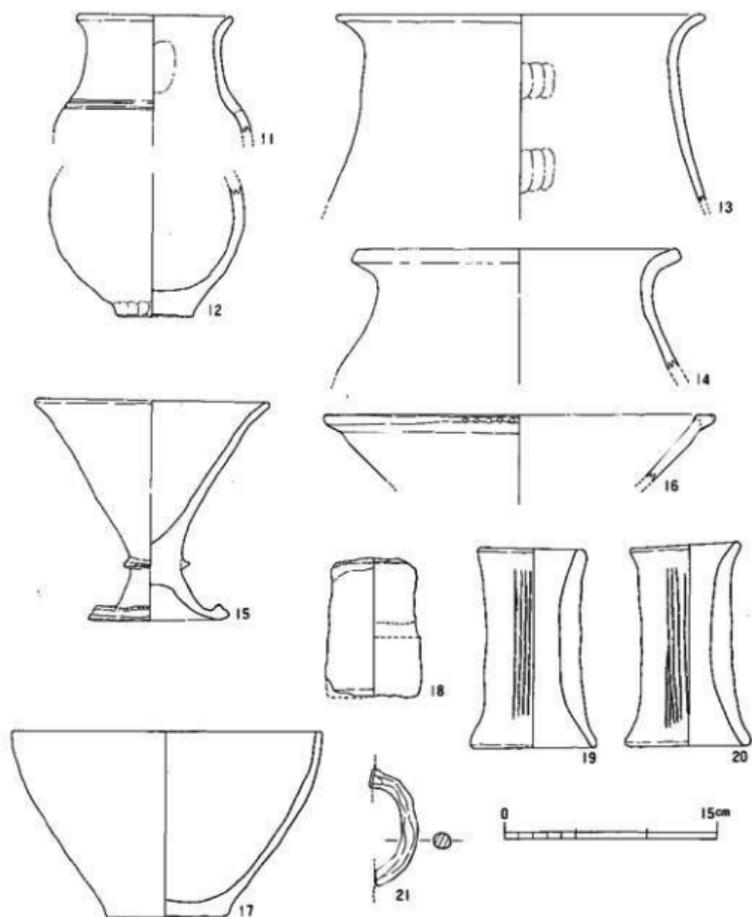
第19図 大 溝



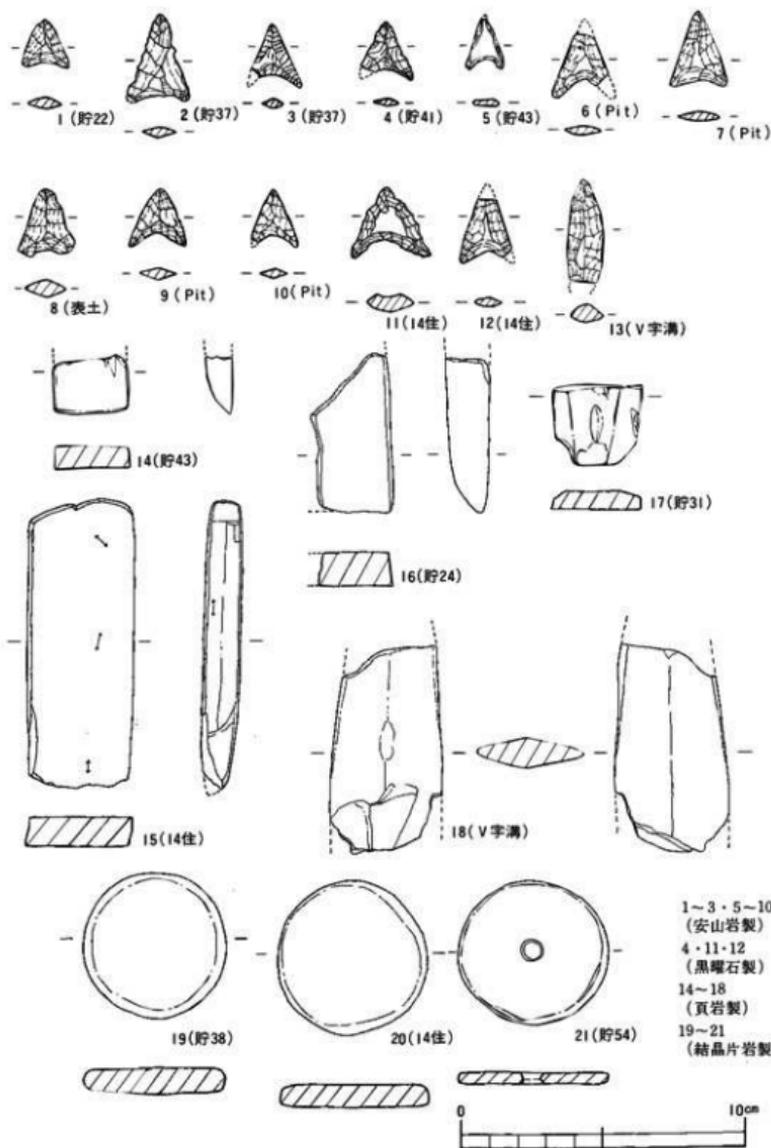
第20図 V 字 溝



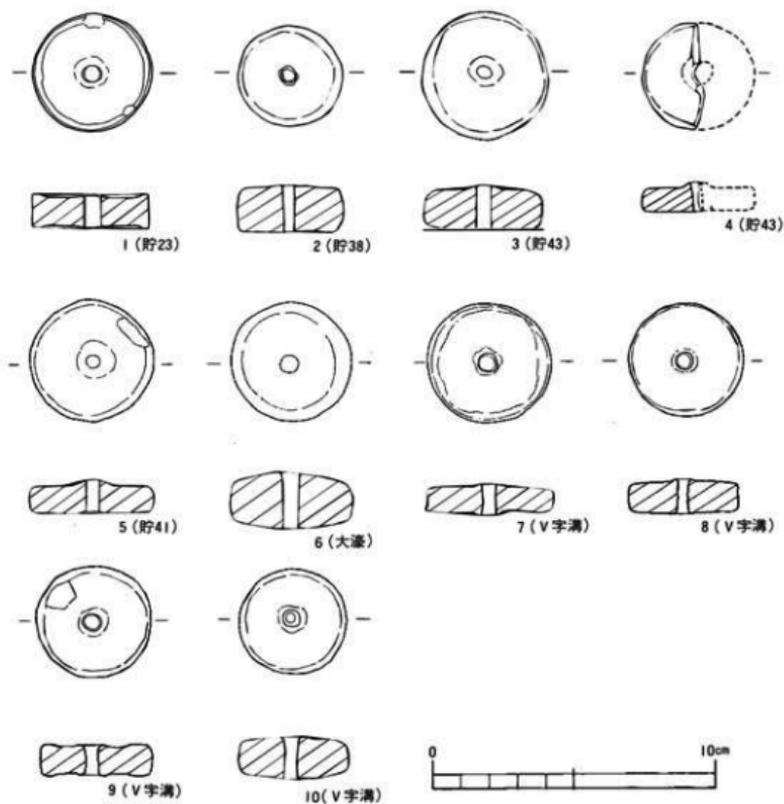
· 第21圖 V字溝出土土器実測圖 (1/4)



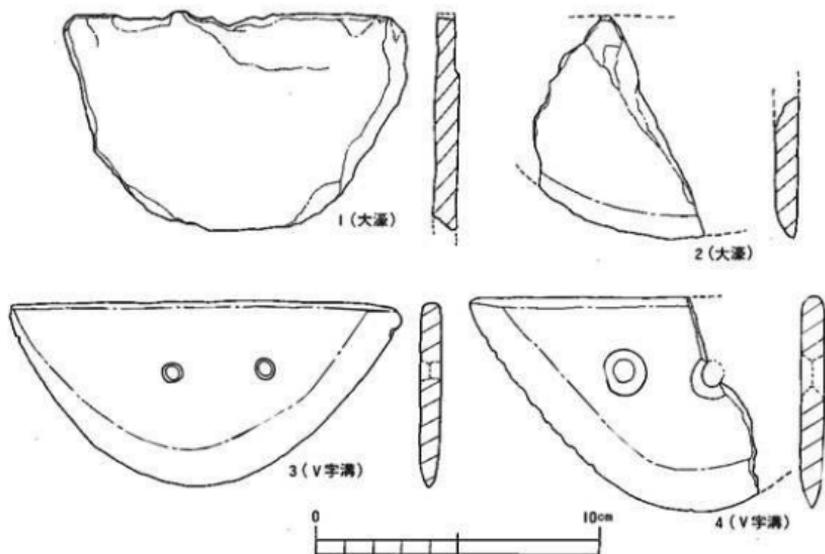
第22图 V字溝出土土器実測図 (1/4)



第23図 出土石製品実測図 (1/2) (( ) 内は出土遺構)



第24回 出土土製品（紡錘車）実測図（1/2）〔（ ）内は出土遺構〕



第25図 出土石製品(石庵丁)実測図(1/2)(( )内は出土遺構)

#### 4. ま と め

第2次、第3次の調査によって発見された弥生時代の遺構は、堅穴住居8軒、貯蔵穴40基、土壇11基、溝2条で、後期の住居跡1軒を省くといずれも前期後半から、中期前半まで、生活の場としての遺構である。これまで調査が行なわれた亀ノ甲、山ノ上1次、北小路の各遺跡で多く発見された墳墓が今回の調査で検出されなかった。今回の調査が台地の中心部に近い場所であったことから台地の中心部には墳墓をつくらず、墳墓群は、台地の縁辺部に限られてつくられたことが推察される。

調査区の西端で一部検出された大濠は、やや西に曲がる様相を見せており、亀ノ甲、山ノ上1次の調査結果から、台地の南端付近をとりまく、だ円形の環濠となる可能性が強い。また、山ノ上1次調査で確認された北西から南東にのびるV字溝は、2次調査で検出できなかったが、3次調査で北から南に向ったV字溝、さらに北西にのびるV字溝が検出されたため、1次調査で検出されたV字溝が、2次調査部分でブリッジをつくり、南側にはほぼ直角に曲がるのか、さらに、北西方向にのびるかは、判明しなかった。さらに3次調査で南にのびるV字溝は、南側200mの所に

検出された、北小路遺跡のV字溝とつながる可能性も出てきた。

3次調査で発見された、3軒の円形住居跡は、北小路遺跡でも3軒発見されており、ほぼ同一時期である。この結果、八女地方にも、弥生時代中期初頭から前半頃に、円形住居を構築する文化が存在していたことがわかった。

これまで、調査された亀ノ甲・北小路・山ノ上上の各遺跡の調査成果から、室岡台地上に営まれた弥生時代集落や墳墓の状態が、次第に解明されつつある。同一時期の遺構や建物が、台地の北側や、北西側でも発見されており、今後調査が進めば、室岡台地上における弥生時代の「ムラ」の復元が可能になるだろう。



第26図 室岡遺跡群位置図 (1/2,500)



第27図 昭和38年発掘の亀ノ甲遺跡と山ノ上遺跡

## 室岡山ノ上遺跡

八女市文化財調査報告書 第12集

昭和61年3月31日

発行 八女市教育委員会  
八女市大字本町647

印刷 青柳工業株式会社  
福岡市中央区渡辺通2丁目9の31  
電話 092 (641) 1431

